

# 一握の砂・悲しき玩具

石川啄木

新潮文庫





いちあく すな かな がんぐ  
 一握の砂・悲しき玩具  
 いしかわたくぼくかしゆう  
 (石川啄木歌集)

高校図書館用

新潮文庫 草 93 C

昭和五十五年四月一日発行

編者

金田 一 京助

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二  
 東京都新宿区矢来町七一  
 電話 業務部(〇三)(二六六)五一  
 編集部(〇三)(二六六)五四二  
 振替東京四一八〇八番

装幀 高松次郎

⊗ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Shinchōsha 1980 Printed in Japan

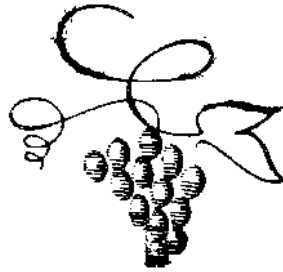
乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新潮文庫

一握の砂・悲しき玩具

石川啄木歌集

金田一京助編



---

新潮社版

334



# 目次

一握の砂	七
(序)	八
我を愛する歌	一四
煙	三三
秋風のころよさに	六六
忘れがたき人人	九二
手套を脱ぐ時	一三四
悲しき玩具	一五五
(あとがき)	二〇五
拾遺	二〇九

解説 金田一京助



一握の砂・悲しき玩具





一握の砂

## (序)

世の中には途法も無い仁もあるものぢや、歌集の序を書けとある、人もあらうに此の俺に新派の歌集の序を書けとぢや。ああでも無い、かうでも無い、とひねつた末が此んなことに立至るのぢやらう。此の途法も無い処が即ち新の新たる極意かも知れん。

定めしひねくれた歌を詠んであるぢやらうと思ひながら手当り次第に繰り展ひろげた処が、

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

此ア面白い、ふん此の刹那せつなの心を常住に持することが出来たら、至極ぢや。面白い処に気が着いたものぢや、面白く言ひまはしたものぢや。

非凡なる人のごとくにふるまへる

後のさびしさは  
何にかたぐへむ

いや斯ういふ事は俺等の半生にしこたま有つた。此のさびしさを一生覚えずに過す人が、所謂  
節の成功家ぢや。

(序)  
何処やらに沢山の人であらそひて  
鬮引くごとし  
われも引きまし

何にしろ大混雑のおしあひへしあひで、鬮引の場に入るだけでも一難儀ぢやのに、やつとの思ひ  
に引いたところで大概は空鬮ぢや。

何がなしに  
さびしくなれば出てあるく男となりて  
三月にもなれり

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

今日われ切に金を欲りせり

怒る時

かならずひとつ鉢を割り

九百九十九割りて死なまし

腕拱みて

このごろ思ふ

大いなる敵目の前に躍り出でよと

目の前の菓子皿などを

かりかりと噛みてみたくなりぬ

もどかしきかな

鏡とり

能<sup>あた</sup>ふかぎりのさまさまの顔をしてみぬ  
泣<sup>な</sup>き飽<sup>あ</sup>きし時

こころよく  
我<sup>われ</sup>にはたらく仕事あれ  
それを仕遂<sup>し</sup>げて死なむと思ふ

よごれたる足袋<sup>たび</sup>穿<sup>け</sup>く時の  
気味<sup>き</sup>わるき思<sup>おも</sup>ひに似<sup>に</sup>たる  
思<sup>おも</sup>出<sup>ひ</sup>もあり

(序)

11  
さうぢや、そんなことがある、斯<sup>か</sup>ういふ様な想<sup>おも</sup>ひは、俺<sup>おれ</sup>にもある。二三十年もかけはなれた此の著者<sup>しやく</sup>と此の読者<sup>よき</sup>との間にすら共通の感<sup>かん</sup>ぢやから、定めし総ての人にもあるのぢやらう。然<sup>しか</sup>る処<sup>ところ</sup>俺等<sup>われら</sup>聞<sup>き</sup>及<sup>およ</sup>んだ昔<sup>むかし</sup>から今までの歌<sup>うた</sup>に、斯<sup>か</sup>んな事をすなほに、ずばりと、大胆に率直<sup>そつじく</sup>に詠<sup>よ</sup>んだ歌といふものは一向<sup>いっこう</sup>に之<sup>これ</sup>れ無<sup>な</sup>い。一寸<sup>いちゆん</sup>開<sup>ひら</sup>けて見てこれぢや、もつと面白い歌<sup>うた</sup>が此<sup>こゝ</sup>の集中<sup>しゆしゆ</sup>に満<sup>み</sup>ちて居<sup>ゐ</sup>るに違<sup>ちが</sup>ひない。そもそも、歌<sup>うた</sup>は人の心<sup>こゝろ</sup>を種<sup>たね</sup>として言葉<sup>ことば</sup>の手品<sup>てしん</sup>を使<sup>つか</sup>ふものとのみ合<sup>あ</sup>点<sup>てん</sup>して居<sup>ゐ</sup>た拙<sup>せつ</sup>者<sup>しや</sup>は、斯<sup>か</sup>ういふ種<sup>たね</sup>も仕掛<sup>しか</sup>も無<sup>な</sup>い誰<sup>たれ</sup>にも承知<sup>じやうち</sup>の出来<sup>こゝろ</sup>る歌<sup>うた</sup>も亦<sup>また</sup>当<sup>あた</sup>節<sup>せつ</sup>新<sup>しん</sup>発<sup>はつ</sup>明<sup>めい</sup>に為<sup>な</sup>つて居<sup>ゐ</sup>たかと、くれぐれも感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>

仕<sup>つかまつ</sup>る。新派といふものを途法もないものと感じがひ致<sup>いたしを</sup>居りたる段、全く拙者のひねくれより起りたることと懺悔<sup>ざんげ</sup>に及び候也。

犬の年の大水後

藪<sup>たき</sup>野<sup>の</sup> 椋<sup>むぐ</sup>十<sup>じゅう</sup>



函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるもの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知る人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著 者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相遜きをたづねて仮にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の記念なり。

我を愛する歌

東海の小島の磯いその白砂しろすなに

われ泣きぬれて

蟹かにとたはむる

頬ほにつたふ

なみだのごはず

一握の砂を示しし人を忘れず

大海だいかいにむかひて一人

なまぢりか  
七八日

泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ  
砂山の  
砂を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐来りて築きたる  
この砂山は  
何の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ  
初恋の

いたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾によこたはる流木に  
あたり見まはし  
物言ひてみる